
【三題噺】誰かが言った。

シュレディンガーの羊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【三題噺】誰かが言った。

【Nコード】

N6301V

【作者名】

シュレディンガーの羊

【あらすじ】

似ている。

と言われたことがある。

誰に言われたかは、もう覚えていないけれど。

似ている。

と言われたことがある。

誰に言われたかは、もう覚えていないけれど。

「火野ー」

「うるさい。黙れ。そのまま窒息しろ」

補習のプリントから顔を上げずに、火野がいつもの毒舌で言い放つ。
今は放課後。

小テストをサボった火野と、小テストに不合格だった俺の補習中。

「てか、火野もこりないよねー」

火野は不良だ。

授業はサボるわ、喧嘩はするわ。

校則違反なんて数え出したらキリがない。

小テストをサボるのも、こうして俺と補習をするのも、もうお約束。
そのくせ頭はいいから嫌になる。

「お前もよくこりないな。今回も不合格はお前だけだろ」

「あと5点足りなかったただけだって」

「10点満点、7点合格のテストに何言ってやがる。馬鹿か、お前」

そんなやり取りの間でさえ、火野は手を休めずにプリントを解答で

埋めていく。

その癖のあるかくばった字に目を落として、知らず知らずに呟く。

「なあ、俺らって似てる？」

「はあ？」

不意な発言に驚いたのか、火野が手を止め顔を上げる。

茶色の瞳に戸惑いが浮かぶ。

「いきなり何だよ」

「誰かに言われた気するんだよね」

へらりと笑って見せれば、火野は目を細めた。

思わず息を呑むような、冷めた色が過ぎる。

でも、それは一瞬で火野はまたプリントに目を戻す。

「俺は不良でお前はクラスの中心人物だろ。全然、似てねえよ」

「ま、そだね。俺は馬鹿で火野は頭よいし」

「まったく誰だよ。似てるって言った奴。こんな奴と似てるとか勘弁してほしい」

火野がらしくない笑い方で言う。

自嘲にも嘲笑にもとれるそれに、何故か淋しさが見えた気がして。

気づけば手を伸ばしていた。

「何だよ？」

怪訝な表情をされてはつとずる。

そのまま手を引っ込めることもできず、火野の頬を引っ張ってみる。

「痛っ。何すんだ、てめえ」

「水谷」

「は？」

「俺、水谷だから」

お前じゃないから——そう手を離す。

火野は何かを言いかけて止め、代わりに大きく息を吐いた。
その反応に満足して、俺はプリントを火野の目の前に掲げる。

「ね、火野。帰りにアイス奢るから、俺のプリントの白紙どうにかして」

「……馬鹿以外の何者でもねえな」

水谷は——呆れたような声音に、俺がけけら笑って、火野も
つられて少しだけ口元を緩めた。

その後、コンビニにて。

「ほら、火野ー。この3つから好きな選んでいいよ」

「全然、ガリガリ君じゃねえか」

「だって、安……うまいから」

「そうか。安いからか」

「俺、ソーダにしよう」

「いや、俺ソーダにするから、お前は別のにしるよ」

「えー。やだ」

「あのさ。お前、誰がプリントやったと思ってんの？」

結局、二人してソーダにした。

「こーゆうとこ似てんのかな？」

「なんか言ったか？」

「いや、べつつにー」

（後書き）

三題噺として書きました。
アイス、不良、馬鹿。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6301v/>

【三題噺】誰かが言った。

2011年10月9日01時14分発行